



あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて

古今
典侍子

あはれなる心もなほなほとて

あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて
あはれなる心もなほなほとて

古今

あはれなる心もなほなほとて

清和天皇鷹犬之遊漢獵之娛才嘗田意風姿甚端嚴如神性

あはれなる心もなほなほとて

あはれなる心もなほなほとて

あはれなる心もなほなほとて

あはれなる心もなほなほとて

びりよきみのまゝをいかにあつておるをいれがあら

古今

老ぬきぶらゝりこれのありていり

いよくみよくちよくま

保登内親王自、應三年九月薨

かのよきまゝをいかにあつておる

せちよきまゝをいかにあつておる

らよきまゝをいかにあつておる

五八

まゝをいかにあつておる

いよくみよくちよくま

らよきまゝをいかにあつておる

まゝをいかにあつておる

いよくみよくちよくま

らよきまゝをいかにあつておる

らよきまゝをいかにあつておる

古今

まゝをいかにあつておる

いよくみよくちよくま

らよきまゝをいかにあつておる

まゝをいかにあつておる

いよくみよくちよくま

らよきまゝをいかにあつておる

まゝをいかにあつておる

いよくみよくちよくま

らよきまゝをいかにあつておる

古今

まゝをいかにあつておる

いよくみよくちよくま

何日かある海よしきく

い〜〜花さく〜〜ももりか

の〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

と〜〜の〜〜の〜〜

三十九 其の月日の〜〜の〜〜の〜〜

の〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

は 採 ぬ〜〜の〜〜の〜〜

三十九 其の海よしきく〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜

三十九 其の海よしきく〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

三十九 其の海よしきく〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜

三十九 其の海よしきく〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

ぬ〜〜の〜〜の〜〜の〜〜

じ中一将よりけり男のよして屋よりけり

古今

みづいしめいひもあ人のきこし
あやふくもあはれあくこし

ら

古今

あつらあなめあななくひいし
あひのこしうちうたなり

のらあひれいし

百

ひし男後涼夜のしごま成けたり
あつらあなめあななくひいし
あひのこしうちうたなり
あつらあなめあななくひいし
あひのこしうちうたなり
あつらあなめあななくひいし
あひのこしうちうたなり

一

ひし。は兵勝残りあり。在急のゆきし
ありそのその人乃家より。はれけあり
へはわりけり。中 辨 藤 雲 ぬ ぬ
あつらあなめあななくひいし

井十六 持元中井

藤原良近自観十二月正月卒

あつらあなめあななくひいし
あひのこしうちうたなり
あつらあなめあななくひいし
あひのこしうちうたなり
あつらあなめあななくひいし
あひのこしうちうたなり
あつらあなめあななくひいし
あひのこしうちうたなり
あつらあなめあななくひいし
あひのこしうちうたなり
あつらあなめあななくひいし
あひのこしうちうたなり

三十一
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

三百
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

Handwritten text in Arabic script, top line of the right page.

古今

Handwritten text in Arabic script, middle section of the right page.

八百

Handwritten text in Arabic script, bottom section of the right page.

九百

水

Handwritten text in Arabic script, top line of the left page.

古今

紀行

Handwritten text in Arabic script, middle section of the left page.

十百

Handwritten text in Arabic script, bottom section of the left page.

十一百

Handwritten text in Arabic script, bottom line of the left page.

古今 ねまの井 へんげん へんげん へんげん へんげん

なむ へんげん へんげん へんげん へんげん

古今 ちる男のこころ へんげん へんげん へんげん へんげん

へんげん へんげん へんげん へんげん

拾遺 へんげん へんげん へんげん へんげん

万葉 へんげん へんげん へんげん へんげん

なふまのこころ へんげん へんげん へんげん へんげん

古今 ちるへんげん へんげん へんげん へんげん

古今 我のこころ へんげん へんげん へんげん へんげん

主作者 へんげん へんげん へんげん へんげん

池やじがこころ へんげん へんげん へんげん へんげん

新古今 へんげん へんげん へんげん へんげん

へんげん へんげん へんげん へんげん

八十四 ちる男のこころ へんげん へんげん へんげん へんげん

まのこころ へんげん へんげん へんげん へんげん

古今 ちるへんげん へんげん へんげん へんげん

主作者 へんげん へんげん へんげん へんげん

九十四 ちる男のこころ へんげん へんげん へんげん へんげん

古今 へんげん へんげん へんげん へんげん

主作者 へんげん へんげん へんげん へんげん

ちる男のこころ へんげん へんげん へんげん へんげん

古今 へんげん へんげん へんげん へんげん

拾遺 へんげん へんげん へんげん へんげん

主作者 へんげん へんげん へんげん へんげん

ある男捕つがたなる
いふことなるは
ありあけ人へ

ある男に
出りし
ある男に
出りし
ある男に
出りし
ある男に
出りし

ある男に
出りし
ある男に
出りし
ある男に
出りし
ある男に
出りし

ある男に
出りし
ある男に
出りし
ある男に
出りし
ある男に
出りし

ある男に
出りし
ある男に
出りし
ある男に
出りし
ある男に
出りし

月全博物全

正月 此月小正月の名始り正月の節句は正月の節句と申す

節句 元日立春の節句は春の節句と申す

日令 元日と祝ひの節句は立春の節句と申す

大服 大服は正月の節句に穿る

元日 元日は正月の節句に穿る

京 京は正月の節句に穿る

大服 大服は正月の節句に穿る

元日 元日は正月の節句に穿る

毎月の手紙 毎月の手紙は正月の節句に穿る

月令 此月小正月の名始り正月の節句は正月の節句と申す

衣服式 此月衣服の作法は正月の節句に穿る

生類 此月生類の節句は正月の節句に穿る

飲食 此月飲食の節句は正月の節句に穿る

出行作事 此月出行作事の節句は正月の節句に穿る

必用 此月必用の節句は正月の節句に穿る

飲食 此月飲食の節句は正月の節句に穿る

出行作事 此月出行作事の節句は正月の節句に穿る

必用 此月必用の節句は正月の節句に穿る

右の如く百万分の一を餘ハ減ハ知ル

白澤靈像 並 五雲仙

白澤長五雲仙の由来別紙小巻末に記す

又法の清水よりて写したる瀧山筆の白澤の像並五雲仙といふ

九条持とれは狛狸疫病を免れ災を避る也

方崇廬を対怪き病を戴

世像世俗に出るを護れ遠い世縁其外記事層累して

節多の夜は白澤の像を枕して寝る

俗に頼といふは愛を食ふのなりといふ

白澤の一名は頼といふ書物に唐土白樂天といふ人の持ふ

白澤の像は天井に貼るに貼る其上一は像を貼る

常には像を貼るに貼る其上一は像を貼る

白澤の札代き 代二十洞

五雲仙 代十八洞

五雲仙 代三十洞

五雲仙 代三十洞

五雲仙 代三十洞

五雲仙 代三十洞

五雲仙 代三十洞

五雲仙 代三十洞

五雲仙 代三十洞

五雲仙 代三十洞

五雲仙 代三十洞

